

『こいつがどうしてわれわれを救えるのか』

サムエル記第一 10 : 1~27

序. 自由がもたらす迷いと不幸。真理がもたらす本当の自由

サムエル記第一 10 章は、いよいよサウルが王として任命されていく過程を見ていくことになります。神によって王としての働きに召し出されたサウルは、この時どのような人格をもって生きていたのでしょうか。今日のいくつかのエピソードの中から、彼の人となり、そして信仰者としての生き方を見ていきたいと思えます。

さて、今日の説教の最初に、「自由」ということについてお話をしようと思えます。自由というのは、あなたにとっていいイメージでしょうか、それとも悪いイメージでしょうか。おそらく、いいイメージを持つ方の方が多いのではないかと思います。自由を別の言葉で言い換えれば、解放されていること、束縛されていないこと、選ぶことが出来ること、強制されていないということなどでしょうか。いずれも良い印象だと思います。しかし、私たち人間の生き方は、必ずしも自由であるといい生き方が出来るとは限らないことが、聖書を読んでいくときにわかっていきます。例えば、士師記において、当時のイスラエル人たちは「それぞれが自分の目に良いと見えることを行っていた」と書かれています。彼らは自由に、それぞれがいいと思ったことを実践していました。では、その実態はどうだったかという、性的な倒錯があり、身勝手な争いがあり、そして偽りの宗教が横行していたのです。自由に生きることは、身勝手な正しさを追求することとほとんど同じだからです。罪人が思い描く、自分にとって都合のいい自由とは、思いのままに罪を犯す自由に他ならないことが、聖書を読むと分かってきます。今の時代も、ますます自由が追求されています。そして、夫婦のきずなはどんどんもろくなり、親子の問題や性的な倒錯はさらに深刻になっています。自由に利益を追求する資本主義が広がる中で、国と国は様々な種類の争いを一層激しくしています。自由であるというのは本来良いことであるはずなのに、罪の問題を抱えている人間が、自由に神様から離れて生きようになると、むしろ正しい道が分からなくなり、勝手な自己正当化を進め、結局本人も周りの人も不幸になっていってしまうのです。

一方で、聖書は迷っている私たちに、世界観と人生観を示して、その生き方に一本の筋を通してくれます。罪人の自由に慣れ親しんでいたところから考えると、そこには従うことが求められています。しかし、むしろ真理の指し示す道筋によって地に足がつくことによって、私たちの人生は安定し、精神はむしろ自由を獲得していくのです。それは、自分が正しい方向に向かっているという平安と、神様に愛されているという自信を受け取るからです。聖書の真理を受け入れ、これに従うことは、束縛ではなくむしろ自由を与えてくれるのです。

もし、私たちが運転しているときに、信号機や道路交通法がなかったとしたら、どれほど恐ろしい交通事故が増えることでしょうか。左側通行が定められ、高速道路や一般道路が定められ、青は進め、赤は止まれと従うべき定めが与えられているからこそ、私たちは安心して運転することが出来るのです。聖書の真理にも似た部分があります。これに従う人は、束縛されるのではなく、むしろ平安と自由をもって、自分の人生を取り扱うことができるようになるのです。あなたは、聖書の真理に従うことで、自分の人生に平安と自由を受け取っておられるでしょうか。今日はみ言葉への従順という点から、青年サウルの人格を見ていくことになります。

1. 王としての油注ぎ（任職式）

・二人だけで

10 章は、9 章の最後のシーンから継続する形で始まっています。ですから、1 節は、預言者サムエルのもとで一晩明かした後、サウルが帰ろうとしたとき、先にしもべを帰らせて、二人だけで話しをしているというシーンです。1 節「サムエルは油の壺を取ってサウルの頭に注ぎ、彼に口づけして言った。『主が、ご自分のゆずりの地と民を治める君主とするため、あなたに油を注がれたのではありませんか。』」油を頭に注ぐというのは、当時のイスラエルにおいては特別な役職のための任職式を表すものでした。特に王、祭司、預言者とといった主に選ばれた特別な働き人が立てられる時、油注ぎが行われました。ですから、この時預言者サムエルによって青年サウルはイスラエルの王としての任職式を受けたのです。

しかし、王の任職式というにしては、あまりにひっそりとした個人的な状況でした。このようなことも、きっと神様のやり方だったのでしょう。まずは個人的な形で、神がサウルをイスラエルの王として召したということがムエルを通して告げられます。その後、まだ半信半疑だったかもしれないサウルの前に、着実に王としての道が開かれていくという展開になります。

サムエルは、まだ昨日会ったばかりの青年サウルに王の油注ぎを行い、この任職が本物であることを教えるために三つのしるしについて語りました。

・三つのしるし

一つ目はこれからの帰り道、ラケルの墓のそばで二人の人に会い、声をかけられるということ。

二つ目は、タボルの櫪の木のところ、三人の人に会う。彼らは礼拝に行く途中で、その献げものの一部であるパンを二つくれるということ。

そして三つ目は、彼の家のあるギブアに到着すると、預言者の一団に出会い、サウルの上に主の霊が激しく下り、預言をし、新しい人に変えられるということでした。

7節「これらのしるしがあなたに起こったら、自分の力でできることをしなさい。神があなたとともにおられるのですから」。一つだけなら、たまたま実現してしまうこともあるかもしれない。しかしこれら三つのことが起きたとしたら、さすがのサウルも信じないわけにはいかなかったでしょう。果たしてどうなるのでしょうか。この後見ていきます。

その前に、今後の予定として8節のことが書かれています。この8節は、今日の箇所ではなんとなく通り過ぎるのですが、実はこの後の箇所です。非常に重要な役割を果たしますので、一緒に読んでおこうと思います。8節「私より先にギルガルに下っていきなさい。私も全焼のささげ物と交わり、いけにえを献げるために、あなたのところへ下っていきます。私があなたのところに着くまで、そこで七日間待たなければなりません。それからあなたがなすべきことを教えます。」これは、王となるよう召されたサウルが、これからの数日の間何をしなければならぬかを示す、預言者からの重要な指示でした。ギルガルで、七日間サムエルを待つということ。これがはっきりと告げられたということを感じておいてください。

この時代、預言者は神様の言葉を取り次いでいるわけですから、サムエルの言葉は神様からの指示でした。この7節と8節のバランスは、自由と服従の在り方を私たちに示してくれています。7節では、「自分の力でできることをしなさい、神があなたとともにおられるから」とある種の自由と成功が告げられた一方で、8節では「七日間待ちなさい。そしてあなたがなすべきことを教えましょう」という従うべき道を示したのです。そのように、サウルに与えられた自由は、神さまの言葉に従うなかで与えられる自由であり、それは自分勝手に神様から離れて生きる罪人の自由奔放さではありませんでした。

果たして、そこから家を目指して帰って行くサウルに、これらすべてのしるしはその日のうちに起こったのでした。三つのしるしのうち、最も重要な三つ目のしるしについてだけ詳しく記録されていました。この10~13節に描かれている「神の霊が激しく下ってサウルが預言する」という出来事の中で、サウルは与えられた主の霊によって大きな変化を遂げました。人々はサウルの姿を見て「キシユの息子は、いったいどうしたことか。サウルも預言者の一人なのか」と口にしました。彼の人格の変化があまりにも劇的だったため、「サウルも預言者の一人なのか」という言葉がある種の流行語のように語り草になったのでした。主は、ご自身が必要であると思われるならば、このように私たちの感じ方、考え方、話し方、生き方をその偉大な力によって作り変えることのできるお方なのです。

2. サウルの人柄

(1) おじに話さなかったこと

このようにして三つのしるしが実現する様をまざまざと体験したサウルは、ギブアにある自分の家に帰って行きました。さて、この後に続く三つのシーンからサウルの人柄を汲み取りたいと思います。

一つ目のシーンは、おじとの会話です。なかなか帰ってこないサウルを心配していたおじは、何があったのか

と尋ねます。サウルは正直に、雌ろばを探していた先で、預言者サムエルのところに行っていたと伝えます。サムエルはイスラエル中に有名な力ある預言者でしたから、彼が何を言ったのかと、おじは尋ねます。すると、雌ろばは見つかっていると教えてくれました、とそれだけを答えたのでした。聖書記者が指摘している通り、サウルが王位に就くとサムエルが語ったことについて、彼は一言も口にしませんでした。どうしてでしょうか。

考えてみますと、すでにイスラエルの中から王が立てられるということはすでに全国民が知っているという状況でした。ただ、預言者サムエルが、誰を、どのような方法で王に選ぶのかは誰も知りませんでした。中には、私が王になりたいとか、私の息子が王にふさわしいとか、自薦・他薦のいくらかはサムエルのところに届いていたかもしれませんが。誰が立てられるのかという話題は人々のうわさだったかもしれませんが。そんな中で、サムエルから直接自分が王になるよと告げられた青年サウルは、このことを誰にも知らせなかったのです。それは徹底して自分の親族にも話さなかった。これは、まだことが明らかにならないうちに、軽率に話しを広めないという慎重さから来ていたのでしょうか。また、「自分が王になる」などととても言えないと単純に謙遜していたのかもしれませんが。いずれにしても、誰かれ構わずしゃべってしまう口の閉じられない男ではなく、状況を考えて、親しい人にさえも秘密を守ることのできる男。それがサウルという人でした。この先のことは、サムエルさんが進めるのを待つべきだと考えていたのなら、それこそ賢明な判断です。

(2)荷物の間に隠れていたこと

次に二つ目のシーンは、王の選出でした。預言者サムエルは民を主のもとに呼び集めて、彼らに王の選出をすること告げました。ただし、このことは神の御心をから大いに外れており、神を悲しませるものであったことをはっきりと宣言していました。18~19 節「イスラエルの神、主はこう言われる。『イスラエルをエジプトから連れ上り、あなたがたを、エジプトの手とあなたがたを圧迫していたすべての王国の手から救い出したのは、このわたしだ。』しかし、あなたがたは今日、すべてのわざわいと苦しみからあなたがたを救ってくださる、あなたがたの神を退けて、『いや、私たちの上に王を立ててください』と言った。今、部族ごと、分団ごとに、主の前に出なさい。」これほどに、微妙な雰囲気の中の王の選出は無かったのではないのでしょうか。預言者が、これは間違った事であると宣言しながら、しかし民の願い通り進んで行く王の選出。自由を間違った意味に捕らえていると、このようなおかしな道を進んでしまうようになります。

さて旧約聖書の時代には、神の御心を尋ね求める方法としてくじが用いられていました。部族ごと、分団ごとにくじを引いていくと、選び出されたのは主の預言の通りキシユの息子サウルとなるのでした。しかし人々が探してもサウルは辺りにいませんでした。人々がここにきているのかと尋ねると、主は「見よ、彼は荷物の間に隠れている」と言われるのでした。サムエルを通して主が教えてくださったのでしょうか。

隠れていたサウルは人々に連れ出され、皆の前に立つとその背の高さが目立ちました。民のだれよりも、肩から上の分だけ高かったからです。頭一つ分、上に出ていたということでしょう。その高身長と立派な体格を見て、民はみな、大声で叫んで「王さま万歳」と言ったとあります。

この箇所から伝わってくるのは、サウルの非常に消極的な姿。一応はミツパに集まって来ていたものの、自分に注目が集まるのを恐れていたのか、一人荷物置き場に隠れていたというのは、そこまで行くと少し頼りないようにも映ります。民は万歳と叫んでいますが、最後までサウルの言葉は何も記録されないまま彼は王様に任命されることとなるのでした。先週の9章からも確認しましたが、主が用いられた働き人は、王になりたいと意欲満々野心に満ちた男ではなく、むしろ自分からは進んでやろうと思っていない人物であったということでした。このように、主の御心は人の計画とはしばしば異なっています。神は、このサウルに力を注ぎ、道を開き、ただ神によってことをなしていく王として導いていこうとされるのでした。

(3)軽蔑・非難されても黙っていたこと

そして最後三つ目は、その後の人々の反応についてでした。サムエルは、王権の定めについて語り、それを文書に記したものを治めさせました。これは8章11節~18節にあったような内容だろうと思われます。こうしてみな、自分たちの家に帰って行きました。ここで、サウルが王に立てられたことについて、二つの反応があった

と記録されます。一つは、神に心を動かされた勇者たちは、彼についていった、ということ。もう一つは、よこしまな者たちは、「こいつがどうしてわれわれを救えるのか」と言って軽蔑し、彼に贈り物を持ってこなかった。これに対して、しかしサウルは黙っていた、とあります。

主は、この若き王サウルのために、勇者たちを味方として用意してくださいました。主が彼らの心を動かしてくださいましたからです。しかし、神のことばに従わない、むしろ自分の目に正しいと思うことをやりたいよこしまな者たちは、サウルに反発しました。彼らはサウルのことを「こいつ」呼ばわりしています。ですが、実際のところ、この時点におけるサウルというのはそう呼ばれても仕方のない男だったのではないのでしょうか。名前が呼ばれても隠れたままです。連れ出されて、しぶしぶ前へ出て行く。そんな奴に、どうして俺たちを救うことが出来るというのか。彼らの避難ももっともだったのでしょ。そして、やはりこれこそ、主の御心なのだと思えます。サウルは、自分の力によって勝利をつかむのではなく、主が彼とともに歩み、主が彼に勝利を与えてくださるので、王として立つことが出来るようになるのです。そのことをサウルが忘れないでいてくれることを願うばかりです。また、民も、サウルをほめたたえるだけでなく、サウルを王として立ててくださった神をほめたたえ続けてくれるようにと思えます。

一部の反発を受けたサウルは、これに下手な口答えをせず、ただ黙って忍耐しました。このような姿には、控えめながら、軽率な議論や愚かな争いをしない、堅実なサウルの性格がうかがえるように思えます。

以上、三つのシーンから見えるサウルの人柄を拾って来ました。それは主の御心が明らかになるまで口を閉じている慎重さであり、王に選出されたのに隠れたままの無欲さであり、そして侮辱と軽蔑を受けてもただ黙っているという忍耐強さ・賢さでした。見た目は背が高く、美男子であったかもしれませんが、総じて控え目でおとなしく、謙遜なところの目につく青年サウル。彼は預言者サムエルの言葉を握りしめながら、一步一步と、静かに王への道を進み始めたばかりでした。

むすび. 神の言葉に従うことによって真の自由を楽しむ者に

振り返って、サムエルもサウルも、今までのところ実に主の御心に忠実に、誠実に生きていたことを確認して大変励まされる思いがします。私たちも、彼らのようでありたいと思えます。聞いた御言葉を忠実に行う。付け加えたり、差し引いたり、勝手に曲げたりしない。従わないための言い訳や不満を言わない。

主が進めようとしておられる偉大な御業を、信仰をもって引き受けていく二人の働き人。私たちにも、その日その日に、置かれた場所において、主の証人としての働きがあります。それが、自分の願ったような形でなくても、謙遜に、忠実に、誠実に、主の御心を果たす者でありますように。主の御用のために用いられるサウルとそしてサムエルを見ながら、主のことばに従う真実な自由を、みなで楽しんでいきたいと思えます。

『こいつがどうしてわれわれを救えるのか』

サムエル記第一 10 : 1~27

序. 自由がもたらす迷いと不幸。真理がもたらす本当の自由

1. 王としての油注ぎ（任職式）

- ・二人だけで
- ・三つのしるし

2. サウルの人柄

- (1)おじに話さなかったこと
- (2)荷物の間に隠れていたこと
- (3)軽蔑・非難されても黙っていたこと

むすび. 神の言葉に従うことによって真の自由を楽しむ者に